

ブータンから学ぶところと幸福

熊谷誠慈 (ここの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)
Seiji KUMAGAI

ブータンの人々は概して時間にこだわらない。ビジネスの現場でさえ、待ち合わせの時間などを厳密に守ることは少ない。時間厳守の生活に慣れていると面食らってしまうが、そもそも待ち合わせが「〇〇時」でなければならない必要があるのか。私たちはそんなことを考えもせず、とにかく時間を決めたり、そして決めた時間に追い回されているのではないか。一方、ブータンの人たちを観察してみると、彼らは注意深く状況を見定め、行動に移る好機をじっとうかがっている。本当に必要な場合は時間をきっちり守るが、そうでない場合は時間にとらわれてあくせくすることがない。こうした機微の中から、彼らは物事の判断の適切なタイミングを感覚的に身につけているのであろう。

ブータンの近現代史を見ても、彼らが状況判断に長けていることがわかる。20世紀後半以降、中国とインドという2大国に挟まれた小さな国々は、大混乱に呑み込まれた。チベットは中国に、シッキムはインドに併合され、ネパールでは王室が転覆した。ブータンも、国王の暗殺未遂、ネパール系難民問題、第2次ドゥアル戦争など、国家存亡の危機に幾度も見舞われながら、こうした難況を巧みにくぐり抜けてきた。

こうした歴史的経緯の中で形成されてきたブータンの国家アイデンティティといえば、「国民総幸福」(GNH: Gross National Happiness)であろう。1972年に若冠16歳で即位したジクメ・センゲ・ワンチュク第4代国王が提唱したこの理念は、国内外の実務家や学者の協力を得て理論整備が進められ、実地の応用に耐え

うるものとなった。また、国際社会に与えた影響も無視できない。複数の先進国が幸福に関する特別委員会を立ち上げたこと、国連で「国際幸福デー」が採択されたことが、その例として挙げられる。

ただ、この「国民総幸福」について論ずる際は、「国民」や「幸福」という概念が何を意味しているか正確に捉える必要がある。大乘仏教の平等精神が根づいているブータンでは、「国民」とは人間はむろん、動物をも包含する「すべての生き物」を意味する。ブータンの人々は通常、寺院参詣の際、個人の幸せではなく、すべての生き物の幸せを願うのである。一方、「幸福」という概念は「究極的幸福」と「世俗的幸福」の2つに分けて考えられる。前者は輪廻転生の苦に満ちた世界から解き放たれた究極の安寧であり、後者は俗世の中で味わう幸せである。ブータンでは仏教が究極的な、国民総幸福が世俗的な幸福を目的としてきたと言える。



鳥・兎・猿・象の4匹がお互いを支え合っているトゥンパブシ(mthun pa spun bzhi)の絵は、ブータンの至るところで見かける。この絵の背後には「縁起」(相対的存在性)という仏教思想が存在しており、ブータン人のアイデンティティ形成に大きく寄与している。

国民総幸福が適用される範囲は、実際の政策としてはブータン1国に限定されるが、理想としては世界全体を隈なく覆う。すなわち、全世界の生き物がともに幸せを享受することが国民総幸福の真の目的である。国民総幸福はブータン王国憲法第9条に規定されているが、わが国の憲法第9条は「平和」に関する条項である。現行憲法の是非についてはさておき、わが国が真に平和国家を目指すならば、一部の指導層のみならずわれわれ1人1人が「平和」について今一度考え、その実現に何がしかの努力をする必要がある。現在、ここの未来研究センター・ブータン学研究室では、ブータンの精神的根幹である「ブータン仏教」を中心に、ブータンの文化や社会について広く研究を進めている。いつの日か、ブータン人と日本人が世界の「幸福」と「平和」について語り合い、ともに行動を起こすときが来ることを願いつつ、両者の間を取り持つ研究を続けていきたいと思う。

前のめりに議論する

奥井遼 (ここの未来研究センター上廣こころ学研究部門研究員)
Haruka OKUI

欧米の研究者たちの議論は「前のめり」である。学会の場で質疑応答の時間が始まると、とりわけ発表者の考察が示唆に富んでいる場合、彼らはためらわずに手を挙げて発言を重ねていく。しばしば議論が白熱した際には、発表者そっちのけ、聴衆同士で議論を始めることもある。まわりの顔をうかがいながら発言に気を遣うことの少ない私たちとはずいぶん異なるスタイルであるなど感心しながらよくよく観察すると、彼らの議論にはいくつかの細かい秩序だった動き、ハビトゥスとでも言うようなしぐさがあることに気がついた。

この話は8月にカナダで行われた学会で感じたことである。舞台は、かのモンゴメリを生んだプリンス・エドワード島を北西に控えた小さな町、アンティゴニッシュ。第33回IHSRC (International Human Science Research Conference) である。IHSRCとは、現象学を起点として教育学、心理学、看護学、その他人間科学の探求を試みる国際会議で、毎年、欧州と北米を行き来して開催している。参加者は、主に人文社会系の研究者であり、議論を通してアイデアを練り上げていくことを得意とし、コミュニケーションに長けた人たちである。

さて、「前のめり」のことであるが、彼らは、前の質問者が話しているうちから手を挙げる。発表者を真っすぐ見ながら、さもここに真実があると云わんばかりに手——といっても人差し指を立てることが多い——を挙げて、次の質問者は私だと主張する。手を挙げている人が複数いる場合は、発表者がちらっと見渡し

て、これと決めた人に向かって、しぐさと目線で「次はあなたね」と告げる。質問者との応酬が終わると、すぐに「予約済み」の人が当たることになる。発表者自らが次の発言をすると決め込んだ場合、指を立てている聴衆には気がつかないふりをして、現在発言中の人に向かってうなずきながら、すぐにでも応答しようという臨戦態勢をとる。その姿を見て、指を立てた聴衆は自分にターンが回ってこないことを悟り、しぶしぶ手を下ろすのである。

議論に参加しない聴衆も、積極的に耳を傾ける観客として場へ貢献する。質問者が発言を始めると、聴衆はいったんその人の方に身体を向け、相づちを打ったり感嘆のため息をついたりして、会場を盛り上げる。このように、議論が議論を喚起して、参加者たちは前のめりになっていくのである。

2、3日彼らといっしょにしていると、発表者と質問者が知人であるか、セッションを始める前からすでに会話を交わしていることに気づく。とくに、今回は領域横断的な学会であることもあってか、運営側の配慮から、開放的で受容的な雰囲気を感じた。4つの発表会場をすべて同じ建

物の同じ階に集める配置、オープンスペースに並ぶコーヒー、かじりながら会話するためのリング、ゆとりをもって組まれたタイムテーブル、司会を置かずフロアから積極的にコメントをするスタッフなど、総じて、参加者たちの議論の機会を保障する工夫が用意されていた。

もちろん、口達者で存在感抜群の人がいるとしても、その人が研究者として優れているか否かは別問題である。取り組むべき価値のある問いかけは、当意即妙に反応するだけではおそらく不十分で、むしろ時間をかけてじっくり答えを出していくべきであるから。今回のIHSRCにおいても、よい議論になるときは、新しい論点が提起されるというよりも、むしろ基礎的で根本的な問題に立ち返る場合が多かったように思われる。Human Scienceの枠組みを越えて、人間とは何か、いかに生きるべきかという問題から目をそらさず、哲学や文学における古典的な思索に粘り強く立脚する研究者が少なからずいた。「前のめり」のハビトゥスは、何年経っても答えが出ないような問題をいつも胸に秘めておく姿勢から生まれてくるのかもしれない。



IHSRCでの議論の風景